

チベット仏教の後伝期開始とウ・ツァンの 出家者の和尚に関する問題

川 越 英 真

0. は じ め に

チベット仏教は9世紀中頃のいわゆる *Glañ Dar ma* の廃仏の結果、チベット中央のウ・ツァン (*dBus・gTsañ*) 地方において、それまで吐蕃王室に外護されていた仏教活動が廃れ、寺院は荒廃して僧がいなくなり、授戒や律の相承等も断たれてしまったといわれる。このウ・ツァン地方に戒律の伝灯が断たれていた間をもって、仏教が存在しなかった時期とされる。そうした状況を打開してウ・ツァン地方で仏教を復興する活動が生じた。それを担ったのが、一般に「ウ・ツァンの10人(または6人)」*dBus gTsañ gi mi bcu(/drug)* と称される出家者たちである。彼らが出家した地は、*Śāntarakṣita* が8世紀後半に初めてサムイエー (*bSam yas*) 寺で授戒して以来の根本説一切有部律が伝持されていた東チベットのカム (*Khams*)¹⁾ 地方である。その地で具足戒を受けて比丘となり、律を学んで中央に戻り、荒廃した寺院の修復や新たに寺院を創建した。そして授戒をして出家者を輩出し、律の釈学などを行って中央地方での仏教復興を成し遂げたといわれる。このようにウ・ツァンの出家者たちがカムからウに戻って、仏教の復興活動を開始した時点をもってチベット仏教の後伝期 (*bsTan pa phyi dar*) が始まったとされる。

この間の事情はチベット史書類に様々に述べられるけれど、かなり錯綜し混乱した内容が見られる。チベット人自身もこうした事情を古くから理解していたようで、例えばチベット随一の歴史作家といえる *ḥGos* 翻訳師 *gShon nu dpal* (1392-1481) はこの時期の仏教史を記すに当たって参照した諸書の内容が一致しないし、それを論理的に考察しがたいので、以前の信頼できると思われる古文書に基づいて、それを書き写した旨を語っている²⁾。また古文書を駆使してチベット仏教史を描写した *dPaḥ bo gTsug lag ḥphreñ ba* (1504-1566) も廃仏の余燼がカムからどのようにして熾ったかの事情は一致しないことが多いと述べている³⁾。

本稿では廃仏後から後伝期開始までの時期におけるチベット仏教史の問題点を2つ採り上げて考察しよう。その1つはチベット人が廃仏から後伝期開始までのウ・ツァンに仏教が存在しなかったという期間を何年と見なしたかという問題、もう1つはカム地方からの仏教復興の立役者であるウ・ツァンの出家者たちの和尚 (*mKhan po/Upādhyāya*) を誰と見なしたかという問題である。この2つは別稿⁴⁾ で論じたウ・ツァンの出家者に関する問題と同様、この時期の仏教史を構成する主要な要素であるが、いろんな伝承が錯綜したせい、チベット史書類に種々の見解が示されて

いる。それを検討することによってチベット人がこの時期の仏教史をどのように解釈したか、その特徴を明らかにしよう。

1. 後伝期開始に関する年代論

チベット仏教史の時代区分⁵⁾は bCom ldan Rig ral らの主張するような前伝期 (sÑa dar), 中伝期 (Bar dar), 後伝期 (Phyi dar) の3期⁶⁾に分けるのではなく, Bu ston (1290-1364) らの主張する前伝期と後伝期とに二分する仕方を採用するのがチベットでの主流となった。その場合, 前伝期は Glan Dar ma の廃仏でもって終わり, 廃仏後に中央チベットのウ・ツァン地方で何年間か仏教が存在しなかった時期を経て後伝期が始まったとされる。この前伝期と後伝期との間に何年経過したかということに関しては, チベット人によって種々の見解が示された。以下, チベット人の主張するその年代論のうち, Bu ston, ḥBrom ston⁷⁾, Nel pa (/Neḥu) パンディタの諸説を中心にその他の説も合わせて検討しよう。

まず, Bu ston は次のように述べる。

ウ・ツァンに教の存在しない状態が70年続いた後, 「ウ・ツァンの10人」が教を(再び)始めたのである。なぜならば, その10人がウに戻ったばかりの時, ある老女が「私は6歳の時, 大徳(bTsun pa)を見た」と言った。「今, 何歳になったのか」と尋ねられると, 「76歳になった」と答えたからである, といわれている。(CBC, 136a)⁸⁾

これによれば Bu ston は, ある老女の証言を根拠に教の再開を「ウ・ツァンの10人」と関係づけて, ウ・ツァンに教が不在であった期間の年数を70年とする見解を示している。その後のチベット人作者はこれを Bu ston 説として引用するが, ただその70年に関しては異なる年数が示されている。例えば, ḥGos 翻訳師は Bu ston を引用して次のようにいう。

カムからチベットのウ地方に僧団が出現した期間について, Bu ston rin po che は, ある老女の言葉に従って, 〈金のと酉〉に仏教が廃されて73年目の〈水のと酉〉に仏教が(再び)生じたのであると述べられた。仏教の伝灯に非常に博学な ḥBrom ston は78年目の〈土のえ寅〉に生じたのであると述べられた⁹⁾。その〈土のえ寅〉から65年目の〈水のえ午〉に Atiśa がチベットにいらっしやった。(DNG, ka. 27b)

ここに引用された Bu ston の発言は先の CBC を典拠¹⁰⁾としたものであろうが, ここでは70年というところを73年目とする相違が見られる。これに関して Mañ thos Klu sgrub rgya mtsho (1523-1594) の TSM (pp. 59-60) は DNG のその箇所を引用して, ḥGos 翻訳師が Bu ston の述べることを正確に理解していないと批判する。そして Mañ thos はその論拠を示すために CBC の当該箇所を引用して, Bu ston 自身の見解ははっきりと説明されていないし, 特に73年目の〈水のと酉〉の年が(復興した)教の最初の年であるとはいささかも説明していないと述べる。この Mañ thos の見解に付け加えるならば, 先に引用した CBC の末尾に「…といわれている (…shes

zer la |)」と述べることから、老女の証言に基づく70年という説がBu ston 自身の提唱ではなく、伝承された説を引用したにすぎないと解釈することもできよう。事実、Mañ thos はBu ston 以前の学者である bCom ldan Rig ral が70年説を述べていることを指摘している¹¹⁾。また73年目という年数と〈水の酉〉という干支とが教の復興した年としてCBCに示されない点はMañ thos の指摘する通りである。

いずれにしても、Mañ thos は70年説をBu ston 説とは見なさないが、他の史書類はhGos 翻訳師と同様にBu ston 説として73年目の〈水の酉〉を後伝期開始年とするもの¹²⁾、あるいはBu ston の主張通り70年¹³⁾とするもの、中にはその両方を併記するもの¹⁴⁾などが見られる。

だが、hGos 翻訳師の挙げたもう1つの干支〈金の酉〉はCBC (130b)に見られ、その年にRal pa can 王が弑され¹⁵⁾、その後にGlañ Dar ma Hū dum btsan が即位したと述べる。CBCでは〈金の酉〉がGlañ Dar ma の廃仏の年としてはっきりと規定されていないけれど¹⁶⁾、Bu ston 以前のGrags pa rgyal mtshan (1147-1216) のBGG¹⁷⁾を始めとする多くの史書類は、この年をGlañ Dar ma の廃仏の年とするので、hGos 翻訳師もそれを採用したと考えられる。その点はhGos 翻訳師の次のような発言から確認できる。

この〈土の未〉(839)とはGlañ Dar ma が即位して4年経った、その〈土の未〉である。

それに続く〈金のえ申〉(840)と〈金の酉〉(841)まで依然として王であった。その〈金・酉〉に仏法を廃して間もなく、彼自身がdPal gyi rdo rje に弑された。したがって、学者たちは仏法が廃されてからどれほど年数が経ったかは、その〈金・酉〉から(計算を)開始するのである。(DNG, ka. 25a-b)

hGos 翻訳師がDNGの中でSroñ btsan sgam po の生年とされる〈土の丑〉の年をA.D. 569年と629年の2種に換算されうる年代比定をしたことはPetech¹⁸⁾らが指摘している。そのため、相関して廃仏の年とされる〈金の酉〉の年も841年と901年との両方に換算されうる矛盾を示すことはRoerich¹⁹⁾らが論じた。上に引用した2箇所のDNGのうち、前者(ka. 27b)は、Atiśa のチベット来訪の年とされる〈水のえ午〉が1042年²⁰⁾に換算されうるので、それから逆算すれば〈土のえ寅〉は978年、〈水の酉〉は973年となり、廃仏の〈金の酉〉の年は901年に換算される²¹⁾。他方、後者(ka. 25a-b)はTshal pa Kun dgaḥ rdo rje のHLDから引用²²⁾した後に述べられる年代論で、すでにPetech²³⁾が論じたように〈土の未〉が839年に、そして〈金の酉〉が841年に換算されることは確定している。

このように、hGos 翻訳師は〈金の酉〉の年を841と901年とに換算される矛盾した年代比定をしているが、901年を比定した原因として、Roerich²⁴⁾がいうように仏教復興開始年を廃仏の〈金の酉〉から78年目の〈土のえ寅〉の年と主張するhBrom ston 説に影響された可能性が大きい。つまり、hGos 翻訳師はAtiśa がガーリーからウに招請された当時(1045年)、ウ・ツァンの出家者の1人であるSum pa Ye śes blo gros²⁵⁾がまだ存命であったこと²⁶⁾を前提とすれば、hBrom ston 説の〈土のえ寅〉を978年²⁷⁾以外に比定できなかったはずである。したがって、hGos

翻訳師は Rin chen bzañ po の年代にからめて、この ḥBrom ston 説の〈土のえ寅〉および Bu ston が述べたとする〈水のと酉〉を次のように規定している。

翻訳師 Rin chen bzañ po (958-1055) が13歳になった時、ガーリーで和尚 Ye śes bzañ po から出家したということは、Khri thañ Jñāna という者が記した翻訳師の伝記の中に書いている。これによれば、〈金のえ午〉(970)に翻訳師は出家した。それから3年経った〈水のと酉〉(973)に Bu ston rin po che の仏教史における老女の話に基づいた仏教の後伝期が始まる。その〈水のと酉〉から5年経った〈土のえ寅〉(978)に ḥBrom ston の見解である後伝期の年が始まる。(DNG, ba. 11a)

前述の DNG (ka. 27b)と同様、これからも Bu ston のいう〈水のと酉〉が973年、ḥBrom ston 説の〈土のえ寅〉が978年に換算できる年代比定を確認できる。これらの箇所から、必然的に廃仏の〈金のと酉〉は901年に相当すると ḥGos 翻訳師が見なしていたことが窺われる。

そのことは Bu ston と ḥBrom ston の両説の他に、Nel pa パンディタの説を述べた一節からも確認できる。すなわち ḥGos 翻訳師は Nel pa 説を、

Nel pa pañḍita Grags pa smon lam tshul khriṃs²⁸⁾ は〈金のと酉〉から108年間教が存在せず、109年目の〈土のと酉〉に教が(再び)生じたという。(DNG, ka. 27b-28a)

と示している。その Nel pa 説は Nel pa パンディタの NPC では、

〈金のと酉〉²⁹⁾の年に仏法が廃されて、〈土のと酉〉の年に(仏法の)余燼が熾った。すなわち ウ・ツァンに(僧)団が出来るまでに9周期年(lo skor dgu=108)³⁰⁾が経過して、109年間 ウ・ツァン四翼(dBus gTsañ ru bshi)に比丘の名前は存在しなかった。(NPC, 37a)

と述べることに対応するものであろう。ḥGos 翻訳師は、この Nel pa 説は Klu mes の直弟子 Ba (/Pa/Pag) śi 長老(gnas brtan)の文書³¹⁾に〈(土のと)酉〉の年に La mo³²⁾に sGyel 寺が建てられたとあるのを、教が復興した最初の年と誤解したのではないかと推定している³³⁾。sGyel (/ḥGyel) 寺の建立の〈土のと酉〉が1009年に換算されることは DNG³⁴⁾からも知られるので、この推定が〈金のと酉〉を901年とする前提によって成り立つことは明らかである。いずれにしても、ḥGos 翻訳師は廃仏から仏教復興までの経過年数と復興開始年の干支とに関して3説を挙げる。すなわち Bu ston の73年の〈水のと酉〉、ḥBrom ston の78年の〈土のえ寅〉、Nel pa パンディタの108/109年の〈土のと酉〉という3説であるが、自身は ḥBrom ston 説を採用³⁵⁾している。

さて、ḥBrom ston 説がチベット人作者の間で最も支持されたことは、他の史書からも知られる。その中で、Paṇ chen bSod nams grags pa (1478-1554) の DMS は ḥGos 翻訳師の挙げていない説も含めて次のように述べる。

(ウ・ツァンの)10人がウに戻って来たのは、教が廃されてからどれくらい年数が経ったかといえ(次の通りである)。まず Nel pa は〈土・未〉に教が廃されてから111年目(傍注: 9

年といわれるけれど、2年の遅れにすぎないので矛盾しない)の〈土・酉〉に教は(再び)興ったという。bCom ldan Rig ral もこれとほぼ一致する。Bu ston rin po che は73年(傍注: 老女の言葉に基づくという)または71年して興ったという。dPal ldan bla ma は98年して興ったという。Kam kam spyan sñā は140年して興ったという。hBrom ston pa は78年目の〈土・寅〉に興ったという(傍注: Deb sñon pa はこれに従う)。つまり、この最後のものが正しい。(DMS, 42)

この中で、廃仏の年を〈土・未〉とし、また年数を111年目とする Nel pa 説は先の DNG に述べることに相違するが、ただ〈土・未〉に関しては DNG (ka.25b)³⁶⁾にも同様の紀年が見られるので DMS³⁷⁾の誤記ではない。しかし NPC を見るかぎりでは、廃仏年は〈金のと酉〉とし、〈土・未〉は見出せない。先に引用したように DNG (ka. 27b) には NPC と一致する〈金のと酉〉という干支が示されているので、DNG の同一の章 (ka) に Nel pa パンディタの2種の廃仏年が記されていることになる。また111年に関しては、DMS の本文に後人の手になると思われる、「9(=109)年といわれるけれど、2年の遅れにすぎないので矛盾しない」という傍注が加筆されている。しかし廃仏年を〈金のと酉〉ではなく〈土(のと)未〉とするため、教の復興した初年とされる〈土(のと)酉〉までの年数が109年では合わないので、適合する111年に変更されたのは当然である。

ところで、DMS は他にも bCom ldan Rig ral, Kam kam spyan sñā, dPal ldan bla ma の説を示している。このうち、最初の bCom ldan Rig ral はナルタン(rNar than)寺第8代の座主 sKyo ston pa (1219-1299)の弟子で、仏教史の時代区分に3期説を主張し、またナルタン大蔵經の成立に尽力してその目録を作成した学者である。彼は前述した Mañ thos の TSM では70年説を述べたとするのに対し、DMS ではその論拠は分からないものの、Nel pa 説とほぼ一致するとして両者の主張は相違する。次の140年説を述べたという Kam kam spyan sñā は1365年に生まれ、1387年に Kam kam の第10代座主に就任した Don grub dpal ba を指す。彼は1417年に仏教史を著作したといわれるので³⁸⁾、あるいはそれが典拠であった可能性もあるが、bCom ldan Rig ral の説と同様にそれを具体的に確認できない。最後の dPal ldan bla ma は Bla ma dam pa とも称される Sa skya pa bSod nams rgyal mtshan (1312-1375) を指す。その98年説は彼の GSM (1368 著³⁹⁾)に次のように述べられている。

Glañ Dar ma 王は〈金のと酉〉に仏法を廃した。〈土のと酉〉⁴⁰⁾に教の余燼が熾ったので、9周期年の間ウ・ツァンに仏法は存在しなかったといわれるけれど、正しくは8周期年⁴¹⁾の98年間、仏法の名前すらも存在しなかった。(GSM, 96a/p. 195)

これによれば、Bla ma dam pa は前述した Nel pa パンディタの説に対応する、廃仏の〈金のと酉〉から〈土のと酉〉までの9周期年すなわち108年ウ・ツァンに仏法が存在しなかったという説を否定し、正しくは8周期年98年であると主張している。この8周期年98年に関して、Kaḥ

thog rig ḥdsin Tshe dbaṅ nor bu (1698-1755) は次のように解説する。

Sa skya の Bla ma dam pa は rGyal po bkaḥ chems の中に、「dPal という比丘が罪深い王を度脱するであろう。それから、8 周期年の間、仏教は存在しないであろう」と述べられていることを考慮した。すなわち、〈金・酉〉から教の空白期間が8 周期年生じたので、それを 1 lo rgan (=60 年) と lo rkyaṅ の 38 年⁴²⁾ とで合わせて 98 年になり、〈土・戌〉に後伝期が始まったと主張する。(KTB, p. 78)

と述べ、8 周期年の論拠を示している。rGyal po bkaḥ chems とは Sroṅ btsan sgam po 王と妃の伝記を主要内容とする、Atiśa が発掘したとされる埋蔵書 (gTer ma) の KKM を指すであろう。しかし KKM の Sroṅ btsan sgam po の予言 (Luṅ bstan) を含む第 16 章⁴³⁾ には Kaḥ thog の記述に該当する箇所は見出せない。また本来 8 周期年は 96 年であるところを、Bla ma dam pa が 98 年とする理由とそれを Kaḥ thog が 60+38 年として解説する意図はよく理解できないが、要するに Bla ma dam pa 説は廃仏年の〈金・酉〉から 98 年経過した〈土・戌〉を後伝期開始年と主張するものといえよう。

以上のような諸説の他に、Thaṅ sde の 53 年説が dPaḥ bo によって次のように述べられている。

仏教の前伝期と後伝期との間にウ・ツァンに教が存在しなかった(期間)は Thaṅ sde の見解では 53 年、Bu ston の見解では 70 年、ḥBrom の見解では 78 年経過したと主張される。(KGT, pt. 1, pp. 133-134)

このように、Bu ston, ḥBrom ston 説と共に、Thaṅ sde の 53 年説が挙げられている。Thaṅ sde とはヤルルン地方 Sor nag thaṅ po che 寺に由来する僧団を意味し、その寺は Klu mes の四大弟子の 1 人 Gru mer Tshul khrims ḥbyuṅ gnas らによって 1017 年⁴⁴⁾ に建てられた⁴⁵⁾。後にカムの Se btsun 門下で学んだ Khu ston が住持した。当時、Khu ston は Klu mes 系統の Thaṅ sde の一切を取り仕切る長老の立場にあった有力者で⁴⁶⁾、そのころ Atiśa も招かれて Thaṅ po che 寺にしばらく逗留して説法や訳経を行った⁴⁷⁾。Khu ston には Lo rgyus chen mo⁴⁸⁾ という著作⁴⁹⁾ があったことが知られており、KGT や DGT などに引用されている。KGT に引用された部分には、次のようにある。

Glaṅ Dar が仏法を廃した〈金・酉〉から 53 年目の〈水のと丑〉に Khu gShon nu rin chen と gÑags Yon tan sñiṅ po に、mChims lHun grags と mChog grub の 2 人を合わせた 4 人は Klu mes を Mon mkhar ḥbras phu へ招請した。翌年の〈寅〉の年に Ka chu⁵⁰⁾ が修復されて (Klu mes が) 住持した。招請した 4 人も出家した。それから 4 年目の〈火・巳〉に Thaṅ po che が建立された。(KGT, pt. 1, p. 122)

ここに示された 53 年目という年数が、おそらく dPaḥ bo のいう Thaṅ sde の 53 年説の典拠であろう。Kaḥ thog も Thaṅ sde 説とは言っていないが、dPaḥ bo の叙述を引用するかたちで

次のようにいう。

rJe gTsong lag ḥphreṅ ba は〈水・丑〉の年に、「ウ・ツァンの10人」中の Klu mes Tshul khrims śes rab は弟子の Gru mer と共に Mon mkhar ḥbras bu に行かれた。これが後伝期の最初であると Klu mes らは主張すると述べられた。mKhan chen Dharmaśrī も Ṇin snañ の中で、後伝期（の開始年）をこの経過年と一致させた。すなわち、〈金・酉〉から52年を経過した〈水・丑〉である。（KTB, pp. 77-78）

この gTsong lag ḥphreṅ ba (=dPaḥ bo) の発言は、たぶん先の KGT の一節に基づいたものであろう。また、干支の〈金・酉〉と〈水・丑〉は Dharmaśrī (1654-1718) の著した天文歴書 Ṇin snañ の自注 (TMN, p. 121) によれば、それぞれ901年と953年とに比定されている。

以上に見たように、廃仏から後伝期開始までの期間に関して ḥBrom ston, Nel pa パンディタ, Bu ston, Bla ma dam pa, Thaṅ sde などの諸説がチベット人によって主張されたことが知られる。ḥGos 翻訳師は ḥBrom ston 説の〈土のえ寅〉を978年、Bu ston 説の〈水のと酉〉を973年、Nel pa 説の〈土のと酉〉を1009年に比定した。このうち、ḥBrom ston, Bu ston 説の西暦換算年はチベット人の作成したチベット仏教史の主要な年表である RMA (11a: 1716 著) や PRM (p. 6: 1748 著) に採用されたように、チベット人の間で定説として受け入れられたようだ。ただ、この年代比定の問題点は ḥGos 翻訳師がみずから廃仏年の〈金のと酉〉を841年と901年の両方に比定しながら、今日確定している841年ではなく、すべて901年としてそれを基準に年代計算していることである。

2. ウ・ツァンの出家者に授戒した和尚

冒頭で触れたように、チベット仏教史において後伝期の開始と結び付けられるのが「ウ・ツァンの10人（または6人）」と称される出家者の仏教復興活動である。この出家者の人数が史書類において種々に数えられていることはかつて別稿で論じた。それとの関連で、ウ・ツァンの出家者が受戒した時の和尚が誰であったかという問題にも多少触れた。この点に関しても史書類の見解は一様でない。すなわち、和尚を Bla chen po dGoṅs pa rab gsal とするもの以外に、Grum Ye śes rgyal mtshan とか ḥTshur (/mTshur) Śes rab mchog とか Cog ro dPal gyi dbaṅ phyug とか sGro Mañjuśrī とかの名を挙げるものがある。

このうち、Bla chen po はウ・ツァンで断たれた根本有部律およびその具足戒を Chu bo ri⁵¹⁾ から逃れてきた比丘からカムで受け、後述するように直接的にか否かは別にしてウ・ツァンの出家者に伝えられて中央での仏教復興へと結びついた。その意味で、Bla chen po は後伝期のチベット仏教がカムから展開していく過程においてキーパーソンであったといえる。また、その素性が明らかでない Grum は Bla chen po から出家⁵²⁾ した、あるいは sPañ (/Yañ) goṅ Ye śes g.yuñ druṅ からとか sGro Mañjuśrī から出家したと諸説あるが、いずれにしても律に博学なカムの仏教

界の実力者となり、いわゆる低地律 (sMad ḥdul) の相承系譜⁵³⁾ に名を連ねている。のみならず、Grum の高弟⁵⁴⁾ の1人で、カム of ḥDan (/IDan) ma⁵⁵⁾ で活動した Se btsun dBaṅ phyug gshon nu (/Byaṅ chub gshon nu) はその門下から ḥBrom ston, Khu ston, rNog ston, Baṅ ston ら、Atiśa の高弟を輩出した人脈につながる点において Grum の存在は無視できない。

カムにおける律の相承問題は Śāntarakṣita 以来、連綿として続いたとチベット人の主張する根本説一切有部律儀の師資相承に関係することである。そこで、ウ・ツァンの出家者に授戒した和尚に関する諸説がどのように史書類に述べられているか検討することによって、この時期の仏教史が混乱して伝承されている様相の一端を窺いたい。

まず、この問題に関して Maṅ thos の TMS は「ウ・ツァンの10人」が律儀を受けた和尚を、1) Bla ma chen po (=Bla chen po) とする説、2) Grum Ye śes rgyal mtshan とする説、3) ḥTshur Śes rab mchog とする説の3説があるという。そして1) は Bu ston 説。2) の説は Grum の受戒の和尚は誰であったかという観点から、その師資相承を A) Bla chen po—sPaṅ (sPa/Yaṅ) goṅ Ye śes g.yuṅ druṅ—Grum Ye śes rgyal mtshan—Klu mes たち、とする系譜と、B) Shi ḥtsho (Śāntarakṣita)—rBa Ratna—gYo dGe ḥbyuṅ—Bla chen—sGro Mañjuśrī—Grum Ye śes rgyal mtshan—Klu mes とする系譜の2種類⁵⁶⁾ がある。3) は DNG に引用された dPon bi (/dBon bi ci)⁵⁷⁾ の文書中に記された説と解説する (cf. TSM, pp. 67-69)。この分類は Bu ston の CBC (136a)⁵⁸⁾ に列挙されるものに類似している点からみて、おそらくそれを参照して作成されたものであろう⁵⁹⁾。それ以外に第4の説として、KGT や DGT に引用された Khu ston の Lo rgyus chen mo に見られる Cog ro dPal gyi dbaṅ phyug も加えるべきであろう。以下、この4説を順に見て行こう。

2-1. Bla chen po を和尚とする説

まず¹⁾ の Bu ston 説は CBC (132a-b) に述べられている。その内容は Thuḥu bkwan 3世 (1737-1802) が著した短編の Bla chen po の伝記 (TBN⁶⁰⁾) にほぼ踏襲されている。のみならず、TBN には ḥGos 翻訳師が dBon bi ci の著作から引用した⁶¹⁾ という DNG (kha. 1a-3a) の一部との対応も見られるので、Thuḥu bkwan が CBC や DNG を参照して伝記として構成した可能性が十分考えられる。以下に Bla chen po の伝記をたどりながら Bu ston 説を示すため、TBN によって Bla chen po (/Bla chen) が具足戒を受けるまでと、その後に「ウ・ツァンの10人」を出家させるまでの経緯を略述しよう。

Bla chen po は〈水のえ子〉⁶²⁾ の年にボン教徒の両親から Tsoṅ kha bde kham⁶³⁾ で生まれた⁶⁴⁾。名前は Mu zu gsal ḥbar⁶⁵⁾ というボン教徒名が付けられた。仏教を信解した Bla chen po は成人して何人かの師に就いて念誦法を学び、発心を請問し、中観、因明、瑜伽等を聴聞した。当時、Glaṅ Dar ma 王が仏教を廃したので、Chu bo ri の修行院にいた dMar ban Śākyamuni と gYo dGe ḥbyuṅ と gTsaṅ Rab gsal の3人の比丘は律関係の典籍を持って逃げた。ガーリー

(mÑaḥ ris), ホル (Hor)⁶⁶⁾の各地を彷徨しながら、東チベットの mDo smad (Amdo) 地方に到って、その地に住み着いた。Dan tig (/Tan tig)⁶⁷⁾ 山で家畜を飼育している者たちから、その3人が岩窟に住んでいることを聞いた Mu zu gsal ḥbar は会いに行き出家を請うた。すると律の本を渡して、これを見て信解するならば出家させようといわれる。Mu zu gsal ḥbar が見ると信解を生じて涙がこぼれた。そして出家を請うたので、gTsañ が和尚、gYo が阿闍梨⁶⁸⁾を務めて出家し沙彌になった。出家名は和尚と阿闍梨の名前を取って dGe ba rab gsal (/dGe ba gsal⁶⁹⁾) と付けられた。後に、とても博学になったので Bla chen dGoñs pa rab gsal (/dGoñs pa gsal⁷⁰⁾) と称される。それから具足戒を請うたが、5人の比丘が揃っていなかったため断られる⁷¹⁾。そこで、Glañ Dar ma 王を殺して Kloñ thañ⁷²⁾に逃げていた lHa luñ dPal gyi rdo rje のもとに行き頼んだが、自分は王を殺したので授戒の補助者を出来ないけれど他の者を探してやろうと言ひ、2人の中国人の比丘 Ko bañ⁷³⁾と Gyi bañ⁷⁴⁾を探して寄越した。そこで先の2人が和尚と羯磨師を務め、dMar が教授師を、中国人の比丘2人が補助者をして Bla chen に具足戒を授けた⁷⁵⁾。

以上は Bla chen po がまず沙彌戒を受けて出家し、その後に具足戒を受けて比丘になるまでの概要 (TBN, 2b-3b) である。比丘になった Bla chen po が、その後に「ウ・ツァンの10人」と出会って和尚を引き受けるまでの経緯は TBN (3b-4a) を要約すれば、次のように述べる。

Glañ Dar ma 王の廃仏によってウ・ツァンに出家者がいなくなったため、受戒の律儀を受けられなかった。だが、mDo smad には Chu bo ri から逃避した3人の学僧と Bla chen が住んでいると聞いて、Klu mes Tshul khriṃs śes rab ら「ウ・ツァンの10人」が律儀を受けにその地に到った。そして gTsañ に具足戒の授受を請うと、自分は年老いて和尚の任を全うできないから Bla chen に頼めといわれる。それに従って Bla chen に請うと、受具して5年⁷⁶⁾以上経っていないので和尚を務められないと断った。だが gTsañ から特例として可能であるといわれたので、Bla chen が和尚、gTsañ が羯磨師、gYo が教授師、dMar と Hwa śaṅ (和尚)が補助者を務めて10人に具足戒を授けた⁷⁷⁾。そして Bla chen から Lo ston, Klu mes, Tshoñ dge, ḥBriñ の主要な4人⁷⁸⁾が教誡を受けた後、Klu mes だけはそこに留まって Grum Ye śes rgyal mtshan から律を聴聞したが、他の者は中央地方へ帰郷した。その翌年、Klu mes も戻って行ったので10人が集合し、各自が寺を住持し出家の律儀や具足戒を普及させて教えを広めた。

以上の TBN によれば、「ウ・ツァンの10人」は Bla chen po を和尚として具足戒を受けた後、中央に戻って仏教復興活動を始めたという。TBN は10人全員の名前を示していないが、上述の箇所は CBC に従ったと推定できるので、CBC (132b) に示される 1. Klu mes Tshul khriṃs śes rab, 2. ḥBriñ Ye śes yon tan, 3. Rag śi Tshul khriṃs ḥbyuñ gnas, 4. sBa Tshul khriṃs blo gros, 5. Sum pa Ye śes blo gros⁷⁹⁾, 6. Lo ston rDo rje dbaṅ phyug, 7. Tshoñ btsun Śes rab señ ge, 8. 9. mÑaḥ ris pa Ḥo brgyad 2 兄弟, 10. Bo doñ pa U pa de dkar が想定されていると見られる⁸⁰⁾。そして「ウ・ツァンの6人」という場合は、10人中の1~4, 6, 7の6人⁸¹⁾を指す。また具足戒の師資相承 (mKhan brgyud) は gTsañ Rab gsal—Bla chen po—Klu mes らウ・ツァ

ンの10人という系譜である。以上は「ウ・ツァンの10人」の和尚を Bla chen po とする 1) Bu ston 説の概要である。

2-2. Grum Ye śes rgyal mtshan を和尚とする説—その1—

次に、和尚を Grum とする 2)-A) の系譜と同様の lHa luñ Rab ḥbyor dbyaṅs—Bla chen po—Zog po mi drug (Yañ/sPañ goñ Ye śes g.yuñ druñ ら 6 人。その 1 人の Yañ goñ から)—Grum Ye śes rgyal mtshan—Klu mes らウ・ツァンの出家者、という師資相承を述べる Nel pa パンディタの NPC を見よう。まず、Nel pa パンディタは Bla chen po が出家した経緯を問題にして、次のように批判する。

ある文書⁸²⁾の見解の中に(次のようにある。)カムに dMar, gYo, gTsañ (/rTsaṅs⁸³⁾) の 3 人が到った。それをボン教徒の息子の Mu⁸⁴⁾zu gsal ḥbar という、山羊や羊を飼育している者が見て信解を生じた。そこで仏法を請問すると『律有光』⁸⁵⁾を渡して、これを見なさい、信解するならば出家させようといわれたので、見ると信解を生じたので出家した⁸⁶⁾という史書がある。口承伝説の中には人の話をそのまま口伝えして説明するものが多いけれど、(この話は)正しくない。(NPC, 33a)⁸⁷⁾

この NPC (1283 著⁸⁸⁾)の批判の対象になった「ある文書」の具体的な書名は明らかでない。ただ Bla chen po が出家する経緯は前述の TBN や CBC (1322 著⁸⁹⁾)と共通する内容をもつ、NPC 以前の文書であることは確かである。現存する史書の中では、12 世紀中頃または 13 世紀後半に成立したと推定⁹⁰⁾されている lDeḥu Jo sras の CDU⁹¹⁾と mKhas pa lDeḥu の KDU⁹²⁾が「ある文書」と類似した内容を有することは認められるが、それ以上の関係は分からない。では、Nel pa パンディタ自身は Bla chen po の出家をどのように見なしていたのであろうか。Bla chen po が具足戒を受けるまでの経緯を NPC (31b-35a) によって要約すれば、次のように述べる。

Chu bo ri の修行院で、gYo dGe ḥbyuñ と gTsañ Rab gsal と dMar ban Śākyamuni の 3 人の比丘が修習していたころ、他の僧たちが異常な行動を取っているのを見たので、呼んで話を聞いたところ、Glañ Dar ma 王が仏法を廃したことを教えられた。そこで 3 人は律と阿毘達磨の典籍を持って逃げた。Nam śod から Hor の地方を経て mDo smad にたどり着いて住んだ。3 人の他にも、ネパールから戻る途中の Ka(/Kwa) Ḥod mchog grags pa や Yer pa から lHa luñ Rab ḥbyor dbyaṅs と Roñ ston Señ ge grags も阿毘達磨や律の典籍をたくさん持ってそれぞれ逃避した。

3 人の比丘が mDo smad に住んでいた当時、ḥPhan yul shogs pa の Mu zu gsal ḥbar というボン教徒の息子の、16 歳になった Mu zu gsal ḥphan がある寺に行った時、出家者が法を釈聞している様子が壁画にあるのを見た。その壁画について尋ねた老女からかつての廃仏の様子や、Chu bo ri からカムに逃げた dMar と gYo と gTsañ の 3 人が生きているにちがいないという話を聞いたところ、宿業によって信解を生じて mDo smad 地方へ探しに行った。途中、あるボン教徒か

ら3人とも An chuñ nam rjoñ の岩窟にいることを聞き、『律有光』を貰ったので道々見ると涙があふれた。そして An chuñ に到着し出家を請うたところ、結局ウの僧6人と中国の和尚2人の8人が集まり、lHa luñ が和尚、Roñ ston が羯磨阿闍梨、gTsañ が教授師をして Mu zu gsal ḥphan に具足戒を授けた。その後、授戒者たちから律、瑜伽師地論、阿毘達磨、中観などを習得して、Dan tig 山の寂処で修習を成就し、Bla chen po dGoñs pa rab gsal と称された。

以上のような NPC の内容は先の TBN と対比すれば、Bla chen po の出身地をラサの北方、ḥPhan po 川流域の地域を指す ḥPhan yul⁹³⁾ とし、具足戒を授けた和尚を lHa luñ Rab ḥbyor dbyaṅs とすること⁹⁴⁾、あるいは沙彌戒の授戒について述べていないことや出家するまでのいきさつなどの主要な点が異なっている。先に続いて NPC は、比丘となって5年以上経たない Bla chen po が自分の授戒者から説得されて和尚を引き受けるという前述の Bu ston 説と同様の話の筋であるが、出家の対象が「仮装の6人」Zog po mi drug (/Kham skyi zog po mi drug⁹⁵⁾) という点が相違する。この「仮装の6人」という呼称の由来は、カム出身の6人が Chu bo ri からカムに逃避した dMar (Śākyamuni) と gYo (dGe ḥbyuñ) の2人⁹⁶⁾ に対し出家を請うたところ、授戒する僧の数が揃っていなかったため出家するまでの間、出家者の身なりを装っていたので、そのように呼ばれたという⁹⁷⁾。このように授戒する僧の人数が足りなくて出家できなかった「仮装の6人」が実際に出家できた事情は、要約すれば NPC (35a-b) に次のように述べる。

比丘となった Bla chen po がやって来て人数が揃ったので、「仮装の6人」は改めて出家を請うた。これに対し、我々は年老いて弟子を護れないので、Bla chen po が和尚をせよと dMar や gYo らがいう。しかし Bla chen po が自分は具足戒を受けて5年以上経っていないので出来ないと答えると、和尚をするのは罪に当たるが、教を弘布するのに大きな意義があるので何としても行えと命じられて承諾する。こうして Bla chen po が和尚、gTsañ が阿闍梨、他の者が立ち会いの僧を務めて「仮装の6人」は出家した。後に彼らは「大徳の6人」bTsuñ pa mi drug⁹⁸⁾ と称されたと述べる。

このように NPC では Bla chen po が和尚として出家させたのは「仮装の6人」と称される者である⁹⁹⁾。この者たちはウ・ツァンではなくカム出身の者とされ、その6人の名前は 1. Ḥal rDo rje¹⁰⁰⁾ dbaṅ phyug¹⁰¹⁾, 2. sNubs dPal gyi byaṅ chub¹⁰²⁾, 3. Yañ¹⁰³⁾ goñ Ye śes g.yuñ druñ¹⁰⁴⁾, 4. Par¹⁰⁵⁾ Rin chen¹⁰⁶⁾, 5. Cañ (/Ñañ)¹⁰⁷⁾ Ye śes seṅ ge, 6. Cog ro¹⁰⁸⁾ Śes rab byaṅ chub という。また Bla chen po は「仮装の6人」の他にも、Śo chuñ pa Śes rab grags pa, An ḥBar ba byaṅ chub, sGro Mañjuśrī らを出家させた¹⁰⁹⁾。この後そのいきさつは記されないが、「仮装の6人」中の1人 Yañ goñ Ye śes g.yuñ druñ から Grum Ye śes rgyal mtshan は出家した。そして師弟で学堂を創設し、後に卓越した大徳になったので Grum Ācārya Ye śes rgyal mtshan と呼ばれたという (cf. NPC, 36a)。

以上の NPC によれば、戒の師資相承 (mKhan brgyud) は lHa luñ Rab ḥbyor dbyaṅs—Bla chen po—Yañ goñ Ye śes g.yuñ druñ (Zog po mi drug の1人)—Grum Ye śes rgyal mtshan

という系譜がたどれる。NPC はこれに続く Grum とウ・ツァンの出家者との関係を述べる前に、『ウ・ツァンの6人』が Bla chen po dGoñs pa rab gsal に(受戒の)律儀を受けたと人の話を真似て説明するのはまったくの誤りである」(NPC, 37a)¹¹⁰⁾と前置きして次のように述べる。

その頃カムで仏教が盛んであると聞いて、仏法を実践したいと欲する者たちがカムに(受戒の)律儀を受けに行った。最初に7人、後に5人の12人が行き、最初に行った1. Klu mes Tshul khriims śes rab¹¹¹⁾, 2. ḥBriñ¹¹²⁾ Ye śes yon tan, 3. Tshoñ dge¹¹³⁾ Śes rab señ ge, 4. Lo ston rDo rje dbañ phyug, 5. Sum pa Ye śes blo gros, 6. rGya Blo gros śes rab, 7. gShon ban Chos mchog という7人は Grum ācārya Ye śes rgyal mtshan に和尚を、Cog ro Śes rab byañ chub に阿闍梨を請うて受戒した。7人のうち前の5人は比丘になり、後の2人は優婆塞になった。

その後に行った5人は8. mThaḥ bshi rGyal ba ḥphags, 9. Rag śi Tshul khriims ḥbyuñ gnas, 10. rBa btsun Blo gros dbañ phyug, 11. sKye¹¹⁴⁾ legs Ņañ ban¹¹⁵⁾ chos skyabs, 12. Grum śiñ Śes rab smon lam である。最初の7人が戻る途中、後から行った5人と出会ったので、どこへ行くのかと尋ねると、mDo smad へ律儀を受けに行くと言った。それに対し、道のりは非常に遠いのでたどり着くのは難しい。それに我々は学処を正しく受けていて、我々が授けるので十分であるから戻れと言ったけれど聞き入れなかった。それならば、我々が和尚の所に連れて行こうと言って、彼らもそれに従った。そして Grum Ye śes rgyal mtshan から受戒し、5人のうち前の3人は比丘になり、後の2人は優婆塞になった (cf. NPC, 37a-38a)。

以上の NPC によれば Grum は和尚として中央地方からカムに受戒に来た最初の7人と後から来た5人の合計12人に授戒し8人を出家させた。この12人のうち受戒後、中央に戻ってウ・ツァンの各地で僧団を創設して有力者になった1~4, 9, 10の6人を「ウ・ツァンの6人」¹¹⁶⁾と一般に呼ぶという。このように Grum がウ・ツァンの者を出家させたと述べるものは、NPC の他にも GSM や GSM から引用した KGT (pt. 1, pp. 124-125) や MTL (pp. 153-154) などにも見られる。このうち KGT は GSM (96a/p. 195-97a/p. 197) から要約して引用した直後に、次のような批判を加えている。

と (Sa skya bla ma の仏教史¹¹⁷⁾の中に)説明してあるけれど、いささか正しくない。すなわち、彼 (Sa skya bla ma) の見解では少年がカムに行って、ただちに Śākya dGe ba gsal と命名された(という。しかし)後に博学になって dGoñs pa rab gsal と称されるのであるから、2度数えるのは適当でない。ウ・ツァンの10人が誰であっても Bla chen やその弟子にも師事しなかったならば、彼 (Bla chen) が教の余燼を熾したことをどのように説明するのか。(KGT, pt. 1, p. 125)

という。この dPaḥ bo の批判は GSM が次のように述べるのが理由になっている。

廃仏の後、ボン教徒の息子の sMu za gsal¹¹⁸⁾ は Chu bo ri からカムに逃げて来た gYo dGe ḥbyuñ, gTsañ Rab gsal, dMar Śākyamuni の3人の比丘と出会った。そして宿業によって信解を生じ、出家を請うて許可された。戒名は3人の名前をもらって Śākya dGe ba gsal と付けた。

その後、多くのカムの者が dGe ba gsal に師事して学者や大徳が輩出したという。その中に NPC という「仮装の 6 人」と同様の名前と、それに加えて Grum Ye śes rgyal mtshan や sGro Mañjuśrī らが列挙されている (cf. GSM, 96a/pp. 195-196)。GSM はここまでを一段落として、続いて「さて、邪悪な王 (Glañ Dar ma) が廃仏して 60 年経った時」(GSM, 96a/p. 196, line 6) という書き出しで、あらまし次のように述べる。

hPhan yul の Shogs¹¹⁹⁾ の sMu gsal śen (/gśen) hbar というボン教徒の息子の sMu za hphen が、ある寺の中で出家者が法を釈聞しているような壁画があるのを見て老女に尋ねた。出家者の像であると聞いて息子は宿業によって信解を生じて涙がこぼれた。そして老女から娘時代の Glañ Dar ma の廃仏の様子と、その時 Chu bo ri などからカムに逃げた出家者たちが現在カムに在るに違いないと聞いて、息子は身命を顧みずカムに行った。そこで lHa luñ dpal gyi rdo rje と出会い、信解を生じて出家を請うところ自分は邪悪な王を殺したので律儀はないが協力をしようと言って、以前に学者や大徳になった者たちと会うことが出来た。そして息子は出家したので、名前も Bla chen dGoñs pa rab gsal¹²⁰⁾ と付けた (cf. GSM, 96a-b/p. 196)。こうしてカムで仏教が盛んになったころ、すなわち廃仏から 80¹²¹⁾ 年経った時、サムイェーの Tshan Ye śes rgyal mtshan 王が援助して、カムで律儀を受けた最初の「ウ・ツァンの 7 人」という者は Grum Ye śes rgyal mtshan に和尚を、Cog ro Śes rab byañ chub に阿闍梨を請うて受戒した。その後、5 人がカムに赴いて同じ和尚と阿闍梨から受戒したと述べる人名や受戒のいきさつ等の内容は NPC と同様である (cf. GSM, 96b-97a/pp. 196-197)。

以上の GSM によれば、ボン教徒の息子の sMu za gsal と sMu za hphen という者が出家して、前者は Śākya dGe ba gsal、後者は Bla chen dGoñs pa rab gsal という戒名を付けたと述べる。つまり dGe ba gsal と dGoñs pa rab gsal とは別人とされている。しかし、Bu ston や rJe Rañ byuñ rdo rje¹²²⁾ や彼らの見解に従う dPañ bo は両者を同一人物と見なし、Śākya dGe ba (rab) gsal が「後に、とても博学になったので dGoñs pa rab gsal と名付けた」¹²³⁾ のであって、GSM のいう出家したからではないというのが KGT での dPañ bo の主張である。すなわち、同一人物が出家して戒名を付けたということを、別人として「2 度数えるのは適当でない」という批判になったと考えられる。また GSM のように、Bla chen po がウ・ツァンから来た Klu mes ら 12 人の受戒に関係しないという立場を取るならば、Bla chen po が「ウ・ツァンの 10 人」を出家させてウ・ツァンの教の余燼を熾すことに貢献したとする Bu ston らの説が成立しないので、GMS の述べることは正しくないというのが dPañ bo の批判の意図であろう。

2-3. Grum Ye śes rgyal mtshan を和尚とする説—その 2—

Mañ thos は Grum を和尚とする説のもう 1 つの系譜を Shi htsho (Śāntarakṣita) — rBa Ratna — gYo dGe hbyuñ — Bla chen — sGro Mañjuśrī — Grum Ye śes rgyal mtshan — Klu mes と示しているが、その典拠については何も触れていない (cf. TSM, p. 68)。Mañ thos がこの系譜

の参考にしたと見られる Bu ston の系譜は同様に、和尚 Bodhisattva (=Śāntarakṣita) と阿闍梨 Dānaśīla, Jinamitra-sBa Ratna-gYo dGe ḥbyuñ-Bla dGoñs pa gsal-sGro Mañjuśrī-Grum Ye śes rgyal mtshan-Klu mes Śes rab と示し、その典拠を「ある遺囑文書」bKaḥ chems kyi yi ge kha cig というのみである (cf. CBC, 136a)。

この系譜の中の Bla chen (/Bla dGoñs pa gsal) が sGro Mañjuśrī に授戒したことは、NPC (36a) や MTL (p. 152) で Bla chen po が「仮装の6人」Zog po mi drug の他に出家させたカムの出家者の中に sGro の名前を挙げることから知られる。また GSM (96a/p. 196) にも Śākya dGe ba gsal (=Bla chen po) に師事して学者や大徳になったカム出身者の中に確認される。しかし sGro と Grum との間に相承関係がないことはすべてに共通する。そうした中で Ñaṅ ral (1124-1192/1136-1204) の CMB (489b-490a) は低地律の師資相承 (mKhan brgyud) を世尊から始めて次のように示す。bCom ldan ḥdas (Bhagavat) - Ḥod sruñ chen po (Mahākāśyapa) - Ñe bar ḥkhor (Upāli) - (中略) - 和尚 Śāntarakṣita と阿闍梨 Dānaśīla, Jinamitra-sBa Ye śes dbaṅ po-dMar Śākyamuni-和尚 gYo dGe baḥi ḥbyuñ gnas と阿闍梨 gTsañ Rab gsal-Bla dGoñs pa gsal-sGro Mañjuśrī-Grum Ye śes rgyal mtshan-ウ・ツァンの5人¹²⁴⁾ または10人- (以下略) という系譜を示し、「ある遺囑文書」の系譜と対照すると Śāntarakṣita 以前は比較できないが、それ以降 Bla chen po までの間に違いが見られる。

また CMB はこの系譜を示しながら、Bla chen po, sGro, Grum と続く3者の相承関係について具体的に何も触れていないが、Bla chen po と Grum との関係は次のように述べる。Bla chen po が gYo を和尚として比丘になって2,3年後に、Grum ḥBar ba byaṅ chub が gYo らに出家を請うた。その後は先に見た NPC (35a) で、Bla chen po が「仮装の6人」の和尚を引き受けたのと同じ経緯によって、Bla chen po が和尚を務めて Grum が出家し、戒名を Ye śes rgyal mtshan と付けたという (cf. CMB, 480b-481a)。また CMB (497a) は Bla chen po が和尚、Grum Ye śes rgyal mtshan が羯磨師、sGro Mañjuśrī が教授師を務めて Klu mes らウ・ツァンの者12人が sDo smad で律儀を受けたと述べるので、CMB の系譜はウ・ツァンの5人または10人が和尚 Bla chen po, 教授師 sGro, 羯磨師 Grum から出家したというように解釈しないと対応しない。

他に Mañ thos の示す系譜と類似するものとして、BSS (p. 89) に、Śāntarakṣita-sBa Ratna-gYo dGe baḥi ḥbyuñ gnas-Bla chen po dGe ba rab gsal-Grum Ye śes rgyal mtshan-sGro Mañjuśrī-Klu mes Śes rab tshul khriṃs という具足戒の低地律系の系譜¹²⁵⁾ がある。Grum と sGro の順番が逆になっている点だけは相違する。BSS (p. 87) は Grum に sGro が、そして sGro に Klu mes らが律儀を受けたと系譜どおりに述べているけれど、その授受のいきさつは示されていない。以上のように Grum を和尚とする第2の説に類似する系譜はあるものの、まったく適合するものは現存史料からは見出せない。

2-4. ḥTshur Śes rab mchog を和尚とする説

さて、3) ḥTshur (/mTshur) Śes rab mchog を和尚とする説は DNG に引用された Bla chen po の伝記¹²⁶⁾ の中に見られる。dBon bi ci といわれるその作者の素性や本来それが伝記として著されたかどうかを含めて題名などの詳細は明らかでない。DNG (kha. 1-3a) に引用された部分は、それから孫引きした形で KGT (pt. 1, pp. 122-124) や PSJ (pp. 350-352) に見られる。また典拠を示さないで孫引きかどうかを判断できないが、TBN (2b, 3b-6a) や DGT (21b-22b) にも対応する箇所がある。

その伝記¹²⁷⁾ によれば、Bla chen po は gTsañ を和尚、gYo と dMar を阿闍梨として出家した後、各地に研学に行った。Kwa Ḥod mchog grags pa¹²⁸⁾ に十万般若波羅蜜の注釈、菩薩地等の阿毘達磨大乘を 12 年間聴聞した後、49 歳の時に Dan tig 山に行き、その地に 35 年住んで 84 歳の〈木のと亥〉¹²⁹⁾ の年に亡くなった¹³⁰⁾。Bla chen po が Dan tig 山に住んでいたころ、その地には中国禪¹³¹⁾ の流れをくむ頓入瑜伽者¹³²⁾ が多くいたので、彼らの誤った思想が広がるのを防ぐためにたくさんの寺や仏塔を建て、そこから Bla chen po の 10 人の弟子が出家したという。

その 10 人の名前は 1. sPa goñ Ye śes g.yuñ druñ, 2. Par¹³³⁾ gnas brtan Grags pa, 3. Ja pa Grags pa, 4. bTsun¹³⁴⁾ chen Śes rab ḥbyuñ gnas, 5. bShad dPal gyi rdo rje, 6. Srag pa¹³⁵⁾ rgya mtsho, 7. Ḥal ba rDo rje dbaṅ phyug, 8. bsNubs lab śi dPal gyi dbaṅ phyug, 9. Zoñ mchog Chos skyoñ, 10. ḥTshur Śes rab mchog といい¹³⁶⁾、ḥTshur もその中の最後に挙がっている。そして出家後の ḥTshur のことは何も述べられていないが、ただ唐突に「ḥTshur (/mTshur) の弟子 (mKhan bu) は Klu mes Śes rab tshul khrims らウ・ツァンの者たちである」¹³⁷⁾ と、ḥTshur と Klu mes らウ・ツァンの出家者との師資を述べるだけである。この場合の弟子は mKhan bu という用語から窺われるように、授戒した和尚の弟子を意味する。したがって、師資相承は gTsañ Rab gsal—Bla chen po—ḥTshur Śes rab mchog—Klu mes らウ・ツァンの者、という系譜が伝記から知られる。これが Mañ thos のいう第 3 の説である。

2-5. Cog ro dPal gyi dbaṅ phyug を和尚とする説

Mañ thos の TSM には挙げられていないが、Khu ston (1011-1075) の Lo rgyus chen mo では Cog ro dPal gyi dbaṅ phyug を和尚とする。ただ、その原本の存在について知られないので、KGT (pt. 1, p. 121) や DGT (23a) に引用された断片的な部分から探るしかない。KGT に引用された一節によれば、次のように述べる。

教が廃された時、ウから Shañ mÑaḥ ḥjam dpal と Yañ goñ Śes rab ḥbyuñ gnas の 2 人はカムに逃げて行った。その時に、Yañ goñ は (受戒の) 根拠 (khuñs) を示し、Shañ mÑaḥ ḥjam dpal から Bla chen dGoñs pa rab gsal が具足戒を受けた。彼 (Bla chen) の弟子は Cog ro dPal gyi dbaṅ phyug と Grum Śiñ slag can の 2 人である。当時、ツァン出身の Lo と Tshoñ の 2 人とウ出身の Klu mes と ḥBriñ の合わせて 4 人が Cog と Grum に和尚と阿

闍梨を請うて受戒した。(KGT, p. 121)

このように、Bla chen の受戒からウ・ツァンの4人の受戒にいたるまでの叙述はごく簡略であるため、この内容から具体的なことをほとんど知ることができない。肝心の人物に関して、Bla chen は先に詳しく見たので改めていうことはない。また、ウ・ツァンの4人の名前¹³⁸⁾は氏族名 (gDuñ/Rus) だけしか記されていないが、一般にウ・ツァンの10人または6人と呼ばれる出家者の中に見られる名前に対応すると考えられる。その理由は別稿¹³⁸⁾で論じたように bSod nams rtse mo (1142-1182) の CJG (313b) に示される4人¹³⁹⁾との対応が類推されるからである。しかし、CJG はその4人の出家の和尚を Bla chen dGe ba gsal とし、異説として Grum Ye śes rgyal mtshan とする点は相違するので、Lo rgyus chen mo を典拠にしたとまではいえない。

その他の人物に関しては、廃仏の時ウから逃げてカムで Bla chen に具足戒を授けた Shañ mÑaḥ ḥjam dpal と Yañ goñ Śes rab ḥbyuñ gnas という2人の比丘や、ウ・ツァンの4人を出家させた和尚の Cog ro dPal gyi dbaṅ phyug という名前は他に見出せないで、具体的なことは分からない。ただし、Grum Śiñ slag can は NPC の Grum Śiñ glag can¹⁴⁰⁾ という者と同じ人物を指すと推定される。Grum Śiñ glag can は NPC によれば Grum Ye śes rgyal mtshan の渾名とされ、その由来¹⁴¹⁾も述べられている。以上から Lo rgyus chen mo で示される師資相承 (mKhan brgyud) は Shañ mÑaḥ ḥjam dpal—Bla chen dGoñs pa rab gsal—Cog ro dPal gyi dbaṅ phyug—ウ・ツァンの4人、という系譜が導かれる。

3. お わ り に

以上、Glañ Dar ma の廃仏から後伝期開始までの期間におけるチベット仏教史の問題点を2つ採り上げて検討した。その結果、この時期のチベット仏教の歴史は、廃仏とそれに続く吐蕃王朝の崩壊後の混迷した時代の影響を受けて正当に後世に伝承されなかったせいか、後の史書類は多様で混乱した内容を伝えていることが明らかになった。前伝期8世紀後半、チベットにおいて Śāntarakṣita が初めて根本有部律の比丘戒を授与した。チベット人にとってそれは釈尊からの連綿とした師資相承の系譜を継承することであり、律を教の根本 (rTsa ba/gShi ma) と見なすチベット人の仏教観からすれば、その断絶や中途の欠落は許されないことである。したがって、この時期の歴史事象が様々に語られる原因が何であったとしても、またたとえそれが潤色の濃いものと見なされるとしても、チベット人はみずからの歴史観、仏教観に基づいてチベット仏教史の伝承の中に、いかに「歴史的事実」として位置づけるか腐心した有り様が窺い知られる。

注

- 1) 本稿でのカム (Khams) という呼称はチベット全体を地域別に西チベット mÑaḥ ris, 中央チ

ベツト dBus gTsañ, 東チベット mDo khams に3区分した場合の mDo khams 地域を意味する。mDo khams は詳しくは mDo khams sgañ gsum とか, mDo khams sgañ drug といわれる。mDo khams sgañ gsum の sGañ gsum とは Tsha ba sgañ と Bo ḥbor sgañ と sMar khams sgañ (cf. NOR, 163a) の3高地 (sGañ gsum), または mDo khams (sMad khams) と mDo smad (gYer [/dByar] mo thañ) と Tsoñ (/bTsoñ) kha (Kyi [/Gyi] thañ) の3境界地 (Khams gsum), または A mdo と Chu mdo と Chab mdo の3交接地 (mDo gsum) の総称である (cf. PSJ, p. 653; KNB, 5a)。また mDo khams sgañ drug の sGañ drug とは sPo ḥbor sgañ, Tsha ba sgañ, dMar khams sgañ, Zal mo sgañ, Mi ñag rab sgañ, Śar smad bla sgañ の総称である (cf. PSJ, p. 653)。他にも Bod もしくは Bod chuñ ñu と対比して Bod chen po という地域区分は前者が dBus gTsañ ru bshi に相当し, 後者が mDo stod と mDo smad とに相当する地域を意味し (cf. KNB, 4b), mDo stod (Khams) と mDo smad (Amdo) とを総称して mDo khams という。この Bod/Bod chuñ ñu と Bod chen po の地域区分論に対する反論は DTK, p. 9; Wylie, 1962, pp. 10-11 (Tib. Text), p. 64 (Trans.) を参照。また Bod chen po は dBus gTsañ と mDo stod, mDo smad とを合わせた全域 (cf. BDG, 60a) とか, mÑaḥ ris skor gsum, dBus gTsañ ru bshi, mDo khams sgañ drug の全域 (cf. 張怡蓀主編『藏漢大辞典』p. 1848) を指す例がある。

- 2) cf. DNG, ba. 10b.
- 3) cf. KGT, pt. 1, p. 121.
- 4) 川越 1989 を参照。
- 5) チベット人の時代区分に関しては, CBC, 136a; TSM, pp. 58-59; PSJ, pp. 346-347 を参照。また羽田野 1968, pp. 71-74 は Bu ston の仏教観に基づく時代区分の仕方を解説する。
- 6) PSJ, p. 347 によれば, 前, 中, 後伝期の3期の分け方も Rig ral のように, 廃仏までを前伝期, Rin chen bzañ po が現れ, 王が施主をして仏法の翻訳をする時期を中伝期, そして王が施主をせずに rÑog Blo ldan śes rab らが翻訳する時期以降を後伝期とする以外にも, いくつか異説のあったことが知られる。詳しくは羽田野 1968, p. 73 を参照。
- 7) ḥBrom ston rGyal baḥi ḥbyuñ gnas (1004/1005-1063/1064)。
- 8) この箇所を典拠として, 佐藤 1986, p. 63 は「ブトンはウイツァンの十人がウイに会したとき, 或る老婆が彼等に, 辛酉の年に廃仏があつてから七十四年経って癸酉の年に仏教が復興したと述べたという説を紹介している (BT, p. 152a)。ブトンの場合は当然辛酉は九〇一年と見なすべきであろう。従ってそれより七十四年目の癸酉の年は九七五年になる」という根拠のない間違いを述べる。すなわち, 佐藤氏の典拠とした, CBC の異版の BT (タシルンポ版: 東洋文庫 No. 345C-2559), 152a には CBC と同様に「辛酉の年」とか「七十四年経って癸酉の年」というような干支や年数の記述はどこにもない。したがって, 辛酉を 901 年と見なすべき根拠はないし, また「癸酉の年」は「九七五年」ではなく, 正しくは 973 年である。
- 9) KSN, 5a-b によれば, この ḥBrom ston の発言は彼の “bsTan rtsis” (仏教年代記) の中にあるという。
- 10) これを裏付けるのは, DNG, ba. 11a の「Bu ston rin po che の仏教史における老女の話に基づいた教の後伝期が始まる」という記述である。
- 11) TSM, p. 60 に「bCom ldan Ral gri は bsTan rgyan ḥbriñ po の中で教の無い期間は 70 年生じたと説いた」という。
- 12) cf. KSN, 5a; RMA, 11a; PSJ, p. 355; PRM, p. 6; DGT, 24a.
- 13) cf. KGT, pt. 1, p. 134. なお, 論拠は不明であるが HLD, 19b も 70 年説を挙げる。
- 14) KTB, p. 78 には, 「Bu ston chen po はウのある老女の言い伝えに基づいて, 〈金・酉〉から後伝期の(開始)まで 70 年あるいは 73 年と主張するので, (後伝期の開始年は) 後者によれば〈水・酉〉に, 前者とする時は〈金・午〉でなければならない」とある。
- 15) DNG, ka. 25a, kha. 5a は Ral pa can の死を〈火のえ辰〉(836) とする。
- 16) CBC, 130b に, 「Ral pa can 王が〈金のと酉〉(841)の年に弑された後, Glañ Dar ma 王が

即位して、大臣たちが戒律に違反する行為を多く行った。また翻訳師やバンディタによって仏典の翻訳が行われた訳経院を壊して翻訳を中断させた。Hu sañ rdo の落慶式は完了しないうまでであった」という一節は廃仏行為が Glañ Dar ma 王の即位後、間もなくして始まったことを示唆し、先の文に続いて、「そして王 (Glañ Dar ma) は年を取ると共に悪魔が彼の心に取り憑いて、僧をすべて還俗させた」という一節は、即位して数年後の出来事のように解釈できる。

- 17) BGG, ta. 7a/199a は「Glañ Dar ma は〈水のと末〉(803) の年に生まれた。15歳の時に父親が亡くなった。39歳の時に弟(Ral pa can)が亡くなった。その後、彼が王位に就いて6カ月間道理にはずれた王であった。〈金のと酉〉(841)の年の終わりに正法を廃した」と述べる。なお、訳文中の「39歳」の箇所のテキストは 'bcu dgu (19)' とあるが、'sum cu rtsa dgu' の誤植と見なした。なぜならば、同書(BGG, ta. 6b/198b)に Ral pa can の死は〈金のと酉〉と述べるので、〈水のと末〉(803)の年生まれの Glañ Dar ma にとって弟の死と自身の即位の〈金のと酉〉(841)の年は39歳に当たる。
- 18) Petech, 1939, pp. 43-45.
- 19) Roerich, 1949, Introduction, pp. 13-15.
- 20) DNG において Atiśa 来訪の〈水のえ午〉の年が1042年と換算される典拠は、DNG の執筆時点の〈火のえ申〉の年、すなわち1476年を現在時とする次のような記述に求められる。すなわち、DNG は Atiśa のガーリー到着年を〈水のえ午〉の年と見なしている (ca. 3b; ba. 11b)。その到着年から執筆現在時までの年数を、「Jo bo (Atiśa) が生まれてから (現在時の) 〈火のえ申〉(1476)まで495年が経過した。そして (Jo bo が) ガーリーに到着されてから435年が経過した」(ca. 13a) とか、「Jo bo rje がチベットにいらっしやってから、この〈火のえ申〉(1476)の年まで435年が経過した」(ca. 20a) と述べることから1042年が算出される。
- 21) Roerich, 1949, Introduction, p. 15.
- 22) hGos 翻訳師は DNG, ka. 23b-25a で Kun dgañ rdo rje の文書(すなわち HLD) 中の Bla ma Rin chen grags pa がチベット語に翻訳した中国の記録書 (rGyañi yig tshañ) から引用している。この中国の記録書については稲葉・佐藤 1964, pp. 11-14 を参照。
- 23) Petech, 1939, p. 43.
- 24) Roerich, 1949, Introduction, p. 15.
- 25) DNG, ka. 27b は「当時、『ウ・ツァンの6人』といわれる者のうち、Sum pa Ye śes blo gros は存命であった。なぜなら、hBrom ston がウの友人たちに Jo bo (Atiśa) を迎えに来よう頼んだといわれる手紙の中に、『最初に比丘の規範を示した大徳 Ye śes blo gros と』と出ているためである」とある。ちなみに、この手紙の本文は NGA, 68b; JNY, 57a-58a; KCS, 89a-90a; KGT, pt. 2, pp. 301-302; BLN, 197b-198b などに引用されている。
- 26) 「ウ・ツァンの6人」という場合、一般に Klu mes, hBriñ, Tshoñ btsun, Lo ston, Rag śi, rBa btsun の6人を挙げ (cf. CBC, 136a; KGT, pt. 1, p. 132; PSJ, p. 355), Sum pa を含めないが、HLD, 19a-b; GBY, stod. 151a-b のように Sum pa を加えた7人のうち Rag と rBa を1組に数えて「ウ・ツァンの6人」と呼ぶ例もある。
- 27) 仮にこの年を認めるとしても、1045年当時の Sum pa は90歳前後の相当な高齢者であったと推定される。
- 28) DNG, ka. 27b; PSJ, p. 355; DGT, 4b; ASP, no. 10829 は °tshul khirms とあるが、NPC, 54a, 55a では °blo gros とする。
- 29) NPC, 12a は「〈金のえ酉 lcags pho bya〉の終わりに、正法が廃された」とあるが、テキストの pho は mo の誤記で、正しくは〈金のと酉 lcags mo bya〉である。
- 30) KDU, p. 394 も同様の紀年を示す。その内容は〈金のえ子〉の年に仏法が廃されて、〈土のえ子〉の年に(仏法の)余燼が熾った。すなわち、dBus の(僧)団が広がるまでに9周期年 (lo skor dgu=108) が経過した、と述べる。この2つの干支のうち、前者は〈金のと酉〉とする校訂が KDU のテキストに加えられているが、後者も〈土のと酉〉と訂正すべきである。

- 31) Ba śi gnas brtan の著作に Klu mes の伝記があったといわれる。cf. ASP, No. 10899, 'Klu mes kyi nram thar dehi dños slob Pag śi gnas brtan gyis mdsad'; DGT, 12b, 'Pag śi gnas brtan gyi Klu mehi nram thar'.
- 32) La mo は Gaḥ ldan の北東の sKyi chu 河の南に位置する (cf. Ferrari 1958, p. 109, n. 111)。
- 33) cf. DNG, ka. 28a.
- 34) DNG, kha. 6a に「Jo bo rje lha gcig (=Atiśa) がチベットにいらっしやる前の 64 年間に、Klu mes 師弟は多くの僧院を造った。〈土のと酉〉の年に La mo に ḥGyel の僧院を建てた」ということに拠れば、Atiśa がチベットに来る前の 64 年間で、〈土のと酉〉に相当する年は 1009 年だけしかない。
- 35) ḥBrom ston 説を採用したことは、例えば「彼 (sNa nam rDo rje dbaṅ phyug; 976-1060) が 3 歳になった 〈土のえ寅〉 (978) から律の教えがカムからウに伝わった」(DNG, kha. 11b-12a), 「Shaṅ sNa nam rDo rje dbaṅ phyug が生まれて足かけ 3 年目の 〈土のえ寅〉 (978) の年に律の教えが生じた」(DNG, kha. 17a) と述べることから窺われる。
- 36) DNG, ka. 25b に「Nel pa の仏教史に 〈土のと未〉の年に正法が廃されたと述べるが、2 年を加える (すなわち金のと酉とする) ことによって多くのものに一致する」とある。この「Nel pa の仏教史」とは NPC を指すであろうが、現存の NPC には対応する箇所はない。
- 37) DMS のテキストは The Collected Works (gSum 'bum) of Pan-chen bSod-nams-grags-pa, vol. 11 (Mundgod, 1988) 所収の異本 (28b) や中国出版本 (『新紅史』Lhasa, 1989, p. 41) も一致して 〈土・未〉とある。
- 38) RMB, 14a には「〈火・酉 (1417)〉 Kam kam pa syan sña don grub dpal ba は Chos ḥbyuṅ bstan pa rin po chehi gsal byed を著作した」とある。cf. PRM, p. 44; DGT, 4b; ASP, p. 504, no. 10833.
- 39) cf. Kuznetsov, 1966, Introduction, pp. 9-10.
- 40) GSM のテキストは Kuznetsov の使用したラサ版、デルゲ版の他に、中国出版本 (『西藏王統記』北京 1981, p. 240) を含むすべてが 〈金のと酉 (lcags mo bya)〉 と記すが、年数と適合しない。関連する NPC, 37a には 〈土のと酉 (sa mo bya)〉 と記すので、十干の lcags (金) は sa (土) の誤記と見なして、〈土のと酉〉に訂正した。
- 41) 8 周期年は $8 \times 12 = 96$ 年であるべきところを、Bla ma dam pa が 98 年とする理由は不明。
- 42) KTB, p. 78, line 15 は 'lo rkyañ pa brgyad' とあるが、*Rare Tibetan Historical and Literary Texts from the Library of Tsepon W.D. Shakabpa*, (New Delhi 1974) 所収の KTB の異本 (23a, line 2) は 'lo rkyañ so brgyad' とあるので、これを採用して pa は so の誤植と見なした。
- 43) cf. KKM, pp. 272-314.
- 44) DNG, kha. 12a, ña. 3b; RMA, 11b; PRM, p. 6.
- 45) cf. DNG, kha. 6b, 7a; VDS, 177b.
- 46) cf. NGA, 69b; JNY, 59a.
- 47) cf. NGA, 75b-76a; JNY, 65a-b.
- 48) 同様の名称を有する、Atiśa の伝記をまとめた Jo bohi Lo rgyus chen mo については KCS, 337b を参照。
- 49) cf. KGT, ja. 154b; DGT, 4b, 'Khu ston brtson ḥgrus g.yuṅ druṅ gi Lo rgyus chen moḥam Log non(/gnon) chen mor grags pa'.
- 50) Ka chu については Vitali, 1990, pp. 1-35 に詳細な調査報告がある。
- 51) Chu bo ri については Wylie, 1962, p. 146, n. 284 を、またその位置については Ferrari 1958 の巻末地図 A を参照。
- 52) Grum の出家について Bu ston は CBC では何も触れていないが、DPN で Bla chen po から出家したことを、「Mu gzu gsal ḥbar が出家して戒名を dGe ba rab gsal と付けた。後に非常に博学になったので dGoṅs pa rab gsal と称された。それから 5 年間律の研鑽を積んだので大

学者になった。そして Pa ši と Grum Ye šes rgyal mtshan の 2 人が dGoñs pa rab gsal から出家して律を学んだ」(DPN, 63b-64a)と述べる。また Tshal pa は「それ (dGoñs pa gsal が受具して) から 5 年経って和尚 dGoñs pa gsal から Grum Ye šes rgyal mtshan と gNubs dPal gyi dbañ phyug が出家した」(HLD, 19a)と、そして BSS, p. 85 は「それ (dGe ba gsal が比丘になって) から 5 年して sNubs babs šiñ と Grum Ye šes rgyal mtshan が出家した」と、Bla chen po からの受戒を述べる。

- 53) cf. CBC, 136b; KGT, pt. 1, p. 135; YYD, 83b.
- 54) cf. NGA, 63b; JNY, 53b; KCS, 84b. 異説として CDU, p. 156 と KDU, p. 393 は Khams pa mi durg (/Khams kyi Sog mo mi drug) 中の sPa goñ (/Yañ goñ), Ḥal lam pa (/Ḥal), gNubs (/sNubs), Cog ro (/ICog ro) の 4 人が学者になって、その 4 人の弟子が Se btsun と Gar mi (/ḥGar mi) で、その 2 人の弟子が Khu ston brTson grus という(カッコ内は KDU)。
- 55) ḥDan ma については羽田野 1956, pp. 14 (706)-15 (705)を参照。
- 56) Mañ thos (TSM, p. 68) は Grum を和尚とする 2) の系譜に関連して、Grub thob U rgyan pa (Rin chen dpal: 1230-1309) 著の rGyal po rabs phreñ から一節を引用して Bla chen—Khams kyi sog po mi drug—(その 6 人の 1 人) bTsun chen Šes rab ḥbyuñ gnas—Grum—Klu mes ら、という 2) の系譜の垂系と見られるものを示す。
- 57) cf. dPon bi (TSM, p. 69)/dBon bi ci (DNG, kha. 3a)/dPon bi (/pi)ci (KGT, pt. 1, p. 122/124).
- 58) CBC, 136a の分類は他にも、Bla chen po—Grum—ウ・ツァンの 10 人という Rigs ral が主張する系譜が示されるが、その内容は具体的に知られない。
- 59) PSJ, pp. 355-356 も Bu ston と同様の系譜を示す。
- 60) TBN のローマ字テキストとその英訳は Watson, 1978 を参照。
- 61) DNG, kha. 3a, 'bśad pa ḥdi rnams dbon bi cis bris pa ltar bkod pa yin te'.
- 62) cf. DNG, kha. 1a; KGT, pt. 1, p. 122; TBN, 2b. CBC には生没年の記載はない。この〈水のえ子〉を A.D. 832 または 892 年と換算する両説がある。詳しくは佐藤 1986, pp. 60-62 を参照。
- 63) DTK, p. 9 によれば、Amdo 地域全体を昔は Tsoñ kha bde khams と呼んだという。
- 64) DNG, kha. 1a; KGT, pt. 1, p. 122; TBN, 2b は〈金・亥〉の年に 35 歳で死んだ大臣 ḥBro stag snañ Khri gsum rje の転生という。この大臣と Bla chen po との関係は Richardson, 1957, pp. 58-59; 佐藤 1986, pp. 60-62 を参照。
- 65) KDU, p. 390 によれば、俗名は Ka ra ḥphan で、Mu zu gsal ḥbar はボン教を学んだ時のボン教徒名という。
- 66) この場合はウイグル民族の地域を指すであろう。なお、張怡蓀主編『藏漢大辞典』, p. 3071 によれば、Hor の意味する民族はかつてウイグル人、蒙古人、吐谷渾人などと時代によって異なり、現在は藏北 (Byañ thañ) 高原の遊牧民と青海省東北地区に住む土族を指すという。
- 67) 現在の青海省化隆県内 (張怡蓀主編『藏漢大辞典』 p. 1244)。Roerich, 1949, p. 65 の注記によれば、Dan tig 山はクンプム (sKu ḥbum) の南東、循化 (Hstīn-hua/Xun-hua) の北の黄河 (rMa chu) の河岸に位置するという。
- 68) DNG, kha. 1a は dMar も阿闍梨として授戒に加わっている。
- 69) cf. CMB, 479b; HLD, 19a; DNG, kha. 1a, 3a; GBY, stod. 150b.
- 70) cf. CJG, 313a; CMB, 480a; HLD, 19a.
- 71) 「中央地方では 10 人の比丘が、辺地では 5 人の比丘が必要である」(BSS, p. 85; CMB, 480a). なお、5 比丘僧団による受具については平川 1960, p. 529 を参照。
- 72) Kloñ thañ については羽田野 1956, p. 15 (705) を参照。
- 73) Keñ wañ (CJG, 313a); Ke dbañ (CMB, 480b); Ke wañ (NPC, 34a); Ke bañ (CBC, 132b).
- 74) Gyim phag (CJG, 313a); Gyim ḥbag (CMB, 480b); Gyim phag (NPC, 34a); Gyi ban (CBC, 132b).

- 75) Bla chen po が受具する話は、古くは Sa skya pa bSod nams rtse mo の CJG (1167 著) に次のように述べられている。「その王 (Glañ Dar ma) の子 Khri gnam lde Ḥod sruñs とその兄弟の Yum brtan は統治を分割した。その 2 人の治世に mDo smad 地方の rMa luñ rdō rje brag Dan tig yañ mgon に gTsañ Rab gsal と gYo dGe ḥbyuñ と dMar ban Śākyamunī という 3 人の比丘が住んでいた。当時、その mDo smad にボン教徒の家系であったけれど、信解を起こした菩薩 dGoñs ba gsal という者が現れた。彼は仏教を信じ、先の 3 人の比丘に中国の和尚 Keñ wañ, Gim phag, Ḍāpo を加えた者から具足戒を受けた」(CJG, 313a-b)。
- 76) BSS, p. 85; CMB, 481a では、和尚を務めるには比丘になって 10 年経つことが律の規則であるが、5 年経ったので違反ではないという。
- 77) Bu ston は Bla chen が和尚、gTsañ が羯磨師、gYo が教授師を務めたという説は gTsañ nag pa が述べたという (cf. DPN, 64a)。gTsañ nag pa brTson ḥgrus señ ge については羽田野 1968, pp. 111-113 を参照。
- 78) CMB, 498a; NPC, 38b; MTL, pp. 154-155 は Sum pa を加えた 5 人に教誡を授けたという。
- 79) CBC, 132b は Ye śes blo とあるが、Ye śes blo gros (CBC, 133b) の誤植と見て訂正する。
- 80) cf. CBC, 132b; DNG, ba.11a; GBY, stod. 151b; NOR, 127a; DMS, 41-41a; KGT, pt. 1, pp. 125-126.
- 81) 「ウ・ツァンの 6 人」と呼ぶ根拠は NPC, 38b-39a; CBC, 136a; KGT, pt. 1, p. 132; MTL, p. 155; PSJ, p. 355 に示される。これについては川越 1989, pp. 190-191 を参照。
- 82) NPC, 33a は「古い史書を見て」という細注が加筆されている。
- 83) NPC では一貫して rTsañs と表記するが、同人の一般的な表記である gTsañ として以下に示す。
- 84) NPC, 33a, line 1 は Mo zu gsal ḥbar とあるが、NPC, 33a, line 4; NPC の中国出版本 (『西藏史籍五部』Lhasa, 1990), p. 33; KDU, p. 390 の Mu zu gsal ḥbar を採る。
- 85) [東北 No. 4125: 北京 No. 5627]
- 86) NPC, 33a は「和尚、阿闍梨 3 人の名前を取って Mu zu dGe ba gsal と付けたといわれる」という細注が加筆されている。
- 87) MTL は NPC を典拠にし、それを踏襲した内容が見られる。この箇所 (NPC, 33a) も MTL, p. 150 は Bla chen dGoñs pa rab gsal がカムで生まれたという説を認めない上に、出家のいきさつや具足戒の三師などについて NPC より詳しく見解を示している。ちなみに、MTL の編者 (『后藏志』Lhasa, 1983 参照) は MTL の著者を Jo nañ Tāranātha とするが、Tāranātha 著作目録 (cf. Chandra, 1963, Text, pp. 18-33) の中に含まれていないので、Tāranātha の著作かどうか疑問である。
- 88) NPC の著作年は 'chu mo lug gi lo rdsogs paḥi ña drug zla baḥi tshes bco lña la | ...śākyañ dge sloñ grags pa smon lam blo gros kyis shib par rtsis pa ni | '(NPC, 53b-54a, lines 5-1) と記す。この 'chu mo lug' 〈水のと末〉が 1283 年に換算されることは Uebach, 1987, pp. 16-17 を参照。
- 89) CBC の奥書に著作年の記載はないが、異版のタシルンポ版 (東洋文庫 No. 345C-2559) の奥書に 'chu po khyi lo dguñ lo sum cu rtsa gsum bshes paḥi dus su brtsams so' (244a, lines 4-5) という後人の手になるものに拠る。cf. PRM, p. 34, 'chu khyi (1322) | bu ston gyi chos ḥbyuñ rin chen mdsod mdsad |'. 関連して羽田野 1968, p. 91 は CBC の著作年代について論じる。
- 90) CDU と KDU の著作年代に関して、Uebach, 1990, pp. 394-395 は CDU と KDU は同一著者による 12 世紀中頃の成立と見るのに対し、van der Kuijp, 1992, p. 489 は両書とも 13 世紀後半を成立年代の上限とし、同一著者によるものかどうかは判断できないという。
- 91) CDU, pp. 154-155.
- 92) KDU, pp. 390-391.
- 93) cf. Ferrari 1958, pp. 82-83, n. 24; Wylie, 1962, p. 162, n. 442.

- 94) KGT, pt. 1, p. 133 は「lHa luñ Rab ḥbyor dbyaṅs に Bla chen が会ったということも正しいとは見ない」と述べ、その根拠は示されないが、Bla chen po が受戒した和尚を lHa luñ Rab ḥbyor dbyaṅs という説を否定する。
- 95) cf. GBY, stod. 151a. なお CDU, p. 156 は Khams pa mi drug とし、KDU, p. 393 は Khams kyī Sog mo mi drug とする (mo は po の誤記)。MTL, p. 151 によれば、ほとんどの文書は Zog po mi drug を Sog po mi drug (「モンゴル人の6人」) と称するというが、MTL 自体はそれを採らない。
- 96) MTL, p. 152 は dMar と gYo の2人に gTsañ を加える。
- 97) cf. NPC, 35a; MTL, pp. 151-152.
- 98) 「仮装の6人」は後に 1. Ḥal, 2. sNubs の2人が学者 (mkhas pa) に、3. Yañ, 4. Pañ の2人が大徳 (bTsun pa) に、5. Cañ (/Ñañ), 6. Cog の2人が学者大徳 (mkhas btsun) にそれぞれなったので「大徳の6人」bTsuñ pa mi drug と呼ばれた (cf. NPC, 35b)。MTL は注 109 のように Zog po mi drug の6人の名前が NPC と相違するが、学者の2人と学者大徳の2人の4人は NPC と同様で、大徳の2人は Śoñ chuñ pa Śes rab grags と An ḥBar ba byañ chub として「学者大徳の6人」Mkhas btsun mi drug と称する (cf. MTL, p. 152)。また、KDU, p. 393 は6人中1-3, 6の4人だけを「学者の4人」mkhas pa mi bshi と称する。CDU, p. 156 も KDU と同様の4人を「学者の4人」とする。
- 99) Bla chen po が「仮装の6人」を出家させた類似の話は GBY (stod. 150b-151a)、MTL (p. 152) に見られる。また GSM, 96a/pp. 195-196 はカムの者というだけで、特定の呼称を付けていないが、NPC, 35b-36a に述べられる Bla chen po から出家した「仮装の6人」らの名前を同様に挙げている。
- 100) Ḥal rDo rje (NPC, 35b)/Ḥal pa rDo rje (KDU, p. 393; GBY, stod. 150b)/Ḥal rDo (MTL, p. 152).
- 101) dbañ phyug (NPC, 35b; GBY, stod. 150b; MTL, p. 152)/byañ chub (KDU, p. 393).
- 102) byañ chub (NPC, 35b)/dbañ phyug (MTL, p. 152)/Pa śi ta chen po (KDU, p. 393)/Phag śi rta (GBY, stod. 150b).
- 103) Yañ (NPC, 35b; KDU, p. 393)/sPa (GBY, stod. 150b)/sPañ (MTL, p. 152).
- 104) g.yuñ druñ (NPC, 35b; MTL, p. 152)/bsruñ (GBY, stod. 150b).
- 105) sPar (KDU, p. 393; GSM, 96a/p. 196)/ḥBar (CMB, 482b).
- 106) Rin chen (NPC, 35b)/Rin chen gsal (CMB, 482b; KDU, p. 393; GBY, stod. 150b).
- 107) Cañ/Ñañ (NPC, 35b)/lCañ (GSM, 96a/p. 196)/Ja (CMB, 482b; KDU, p. 393)/Jo bo (GBY, stod. 150b).
- 108) Cog ro (NPC, 35b)/Co ro (GSM, 96a/p. 196)/Co (CMB, 482b).
- 109) MTL, p. 152 は NPC の 3. Yañ goñ Ye śes g.yuñ druñ と 4. Par Rin chen の2人に替わって Śoñ chuñ pa Śes rab grags と An ḥBar ba byañ chub とする。この2人は NPC, 36a では Bla chen が「仮装の6人」以外に出家させた者の中に入っている。
- 110) MTL, p. 153 にも NPC を踏襲した同様の趣旨を述べる。
- 111) Śes rab tshul khriṃs (GSM, 96b/p. 196).
- 112) ḥBri (GSM, 96b/p. 196).
- 113) ge (GSM, 96b/p. 196).
- 114) sKyes (GSM, 96b/p. 197).
- 115) bran (GSM, 96b/p. 197; KGT, pt. 1, p. 125).
- 116) この6人は CBC (136a), KGT (pt. 1, p. 132), PSJ (p. 355) などの指す者と同一である。
- 117) KGT, pt. 1, p. 124 は GSM を 'Sa skya bla maḥi chos byuñ' と称する。
- 118) cf. sMu za gsal (GSM, 96a/p. 195)/sMa za gsal (『西藏王統記』北京 1981, p. 241)/sMu gsal ḥbar (KGT, pt. 1, p. 124).
- 119) DMS, 41 は 'Me loñ ma' (=GSM) に Bla chen dGoñs pa rab gsal が dBu stod の Shogs

- に生まれて、カムに律儀を受けに行ったと説明するのは正しくない」と、Bla chen の出生地をウ地方と述べることを否定する。
- 120) GSM, 96b/p. 196 は Bla chen dGoñs par gsal とあるが、『西藏王統記』北京 1981, p. 242 の表記を採る。
- 121) GSM, 96b/p. 196 は brgya bcu とあるが, brgyad bcu (Kuznetsov, 1966, p. 196, n. 269; 『西藏王統記』北京 1981, p. 242) を採る。
- 122) KGT, pt. 1, p. 125 に引用される rJe Rañ byuñ rdo rje とは Karma pa 第 3 世 Rañ byuñ rdo rje (1284-1339) を指すであろうが, 引用文の典拠は示されていない。
- 123) cf. KGT, pt. 1, 125; CBC, 132a.
- 124) 5 人とは Klu mes, ḥBriñ, Lo ston, Tshoñ ge, Sum pa を指す (cf. CMB, 497b-498a)。
- 125) 佐藤 1986, pp. 65-66 を参照。なお, 佐藤 1986, p. 66 はこの系譜をサムイェーのケンポの系統というが, 誤りである。
- 126) KTB, p. 79 に「Klu mes が Bla chen po の弟子 mTshur Śes rab mchog から律儀を受けたということは Klu mes の直弟子 Ba śi gnas brtan が述べている」とある。KTB の著者 Kaḥ thog はこの典拠を示していないが, おそらくそれは DNG (kha. 1-3a) の Bla chen po の伝記を参照しての発言であろう。ただ, それが Kaḥ thog のいう Ba śi gnas brtan でなく, dBon bi ci の著作であることは DNG, kha. 3a; KGT, pt. 1, pp. 122, 124 を参照。
- 127) 伝記に基づいた Bla chen po の仏教観については羽田野 1956, pp. 18 (702)-21 (699) を参照。
- 128) DNG, kha. 2a によれば, Kwa はネパールで多くの法を聴聞した後, カムに行き, 東方の IHa rtse bhig tig の僧団にいたという。また NPC によれば Kwa はネパールからの帰途に廃仏の話聞き, 阿毘達磨の典籍を驛馬に積んで北道 (Byañ lam) を逃げた (32b)。後に Bla chen po の受具に立ち会い, 瑜伽師地論を授けたという (34a-b)。
- 129) DNG, kha. 3a に「この〈木のと亥〉は廃仏の〈金・酉〉から 75 年目である」という dBon bi ci か ḥGos 翻訳師かの解釈が加えられている。なお, 注 62 の生年との対応で, 没年の〈木のと亥〉を A.D. 915 または 975 年に換算する両説がある。
- 130) cf. DNG, kha. 3a; KGT, pt. 1, p. 124; PSJ, 352; TBN, 5b.
- 131) cf. PSJ, p. 351, 'gcig char ḥjug pa shes paḥi hwa śaḥ gi lta ba can'.
- 132) Cig char (/car) ḥjug paḥi rnal ḥbyor pa (DNG, kha. 2b; TBN, 4b).
- 133) Bar (TBN, 5a).
- 134) Cog (TBN, 5a).
- 135) Srag pa → Srag (TBN, 5a).
- 136) TSM, p. 68 はこの 10 人中の 1~4, 7, 8 の 6 人は同頁に引用する rGyal po rabs phreñ (注 56 参照) の Khams kyi sog po mi drug との対応を指摘する。
- 137) cf. DNG, kha. 2b; KGT, pt. 1, p. 123; PSJ, p. 351; DGT, 22b. この記述はウ・ツァンの 10 人の和尚を Bu ston 説に従って Bla chen po とする TBN には含まれていない。その理由は KGT や PSJ が諸本を参照して諸説を併記する史書であるのに対し, TBN は Bla chen po の伝記として著されたので, 内容の一貫性が求められるからであろう。
- 138) CJG, 313b の和訳は川越 1989, p. 193 を参照。
- 139) 4 人の名前は Lo ston rDo rje dbaḥ phyug, Tshoñ ge Śes rab seṅ ge, Klu mes Tshul khriṃs śes rab, ḥBri rje Ye śes yon tan rdsiñ kar ba (=ḥBriñ Ye śes yon tan) である。
- 140) Grum Śiñ glag can (DNG, ga. 30b)/ Grum Śiñ rlag (pa) can (CMB, 482a)/Grum Śiñ slag can (KGT, pt. 1, p. 121)/Grum Phyiñ klag can (BSS, p. 86)/Grum Phyiñ lhag can (DGT, 23a).
- 141) cf. NPC, 36b-37a; CMB, 482a. 由来の内容については川越 1989, p. 196 を参照。

〈略 号 — 覧〉

- ASP: A khu rin po che Śes rab rgya mtsho, “dPe rgyun dkon pa ḡgaḡ shig gi tho yig”, L. Chandra, *Materials for a History of Tibetan Literature*, pt. 3, (New Delhi, 1963)
- BGG: Grags pa rgyal mtshan, “Bod kyi rgyal rabs”, *Sa skya paḡi bkaḡ ḡbum*, vol. 4, (Tokyo, 1968)
- BDG: Ṅag dbaḡ Blo bzaḡ rgya mtsho, “Deb ther rdsogs ldan gshon nuḡi dgaḡ ston”, (東北大学附属図書館所蔵 No. 5664)
- BLN: Yoḡs ḡdsin Ye śes rgyal mtshan, “Byaḡ chub lam gyi rim paḡi bla ma brgyud paḡi nram par thar pa”, vol. ḡa, (東洋文庫所蔵 No. 371-2664)
- BSS: “sBa bshed shabs btags ma”, R.A. Stein, *Une chronique ancienne de bSam-yas : sBa-bḡed*, (Paris, 1961)
- CBC: Bu ston Rin chen grub, “Chos kyi ḡbyuḡ gnas gsuḡ rab rin po cheḡi mdsod”, *The Collected Works of Bu ston*, pt. 24, (New Delhi, 1971)
- CDU: lDeḡu Jo sras, “Chos ḡbyuḡ chen mo bstan paḡi rgyal mtshan”, 『底吾史記』 (Lhasa, 1987)
- CJG: Sa skya pa bSod nams rtse mo, “Chos la ḡjug paḡi sgo”, *Sa skya bkaḡ ḡbum*, vol. 2 (Tokyo, 1968)
- CMB: Ṅaḡ ral Ṅi ma ḡod zer, “Chos ḡbyuḡ me tog ḡḡin poḡi sbraḡ rtsiḡi bcud”, R.O. Meisezahl, *Die grosse Geschichte des tibetischen Buddhismus nach alter Tradition*, (Sankt Augustin, 1985)
- DGT: Brag dgon dKon mchog bstan pa rab rgyas, “Deb ther rgya mtsho”, *The Ocean Annals of Amdo*, pt. 1, (New Delhi, 1977)
- DPN: Bu ston Rin chen grub, “ḡDul ba spyiḡi nram par gshag pa ḡdul ba rin po cheḡi mdses rgyan”, *The Collected Works of Bu ston*, pt. 21, (New Delhi, 1971)
- DMS: bSod nams grags pa, “Deb ther dmar po gsar ma”, G. Tucci, *Deb t'er dmar po gsar ma*, (Roma, 1971)
- DNG: ḡGos lo tsā ba gShon nu dpal, “Deb ther ḡḡon po”, *The Blue Annals*, (New Delhi, 1976)
- DTK: dGe ḡdun Chos ḡphel, “Deb ther dkar po”, 『白史』 (北京 2002)
- GBY: sTag tshaḡ dPal ḡbyor bzaḡ po, “rGya bod kyi yig tshaḡ mkhas pa dgaḡ byed chen mo”, (Thimphu, 1979)
- GSM: Sa skya pa bSod nams rgyal mtshan, “rGyal rabs gsal baḡi me loḡ”, B.I. Kuznetsov (ed.), *Rgyal rabs gsal ba'i me long*, (Leiden, 1966)
- HLD: Tshal pa Kun dgaḡ rdo rje, “Hu lan deb ther”, *The Red Annals*, (Gangtok, 1961)
- JNY: mChims Nam mkhaḡ grags, “Jo bo rin po che rje dpal ldan a ti ḡaḡi nram thar rgyas pa yoḡs grags”, *Ka-dam Pha-chos*, pt. 1, (Gangtok, 1977)
- KCS: Las chen Kun dgaḡ rgyal mtshan, “bKaḡ gdams chos ḡbyuḡ gsal baḡi sgron me”, (Bibliothèque Nationale de Paris 所蔵)
- KDU: mKhas pa lDeḡu, “rGya bod kyi chos ḡbyuḡ rgyas pa”, 『弟吳宗教源流』 (Lhasa, 1987)
- KGT: dPaḡ bo gTsug lag ḡphreḡ ba, “mKhas paḡi dgaḡ ston”, *Mkhas-paḡi-dgaḡ-ston*, pts. 1-4, (New Delhi 1959-1962)
- KKM: “bKaḡ chems ka khol ma”, 『柱間史』 (蘭州 1989)
- KNB: Kloḡ rdol bla ma Ṅag dbaḡ blo bzaḡ, “bsTan paḡi sbyin bdag byuḡ tshul gyi miḡ gi graḡs”, *The Collected Works of Longdol Lama*, pts. 1, 2 (New Delhi, 1973)
- KSN: Paḡ chen bSod nams grags pa, “bKaḡ gdams gsar rḡiḡ gi chos ḡbyuḡ yid kyi mdses rgyan”, *Two Histories of the Bka'-gdams-pa Tradition from the Library of Burmiok Athing*, (Gangtok, 1977)

- KTB: Kaḥ thog Tshe dbaṅ nor bu, “Bod rje btsan poḥi gduṅ rabs tshig ṅuṅ don gsal”, *Bod kyi lo rgyus deb ther khag lña*, 『西藏史籍五部』 (Lhasa, 1990)
- MTL: “Myaṅ yul stod smad bar gsum gyi ṅo mtshar gdam gyi legs bśad mkhas paḥi ḥjug ṅogs”, 『后藏志』 (Lhasa, 1983)
- NGA: Bya ḥdul ḥdsin brTson ḥgrus ḥbar, “Jo bo rje dpal ldan mar me mdsad ye śes kyi rnam thar rgyas pa”, (東北大学附属図書館所蔵 No. 7043)
- NPC: Neḥu paṇḍita Grags pa smon lam blo gros, “sṅon gyi gdam me tog gi phreṅ ba”, *Rare Tibetan Historical and Literary Texts from the Library of Tsepon W.D. Shakabpa*, (New Delhi, 1974)
- NOR: ṅor chen dKon mchog lhun grub & ṅor chen Saṅs rgyas phun tshogs, “Dam paḥi chos kyi byuṅ tshul legs par bśad pa bstan pa rgya mtshor ḥjug paḥi gru chen”, Ngawang Tobgay (ed.), *A History of Buddhism*, (New Delhi, 1973)
- PRM: Sum pa mkhan po Ye śes dpal ḥbyor, “dPag bsam ljon bzaṅ Reḥu mig”, Lokesh Chandra (ed.), *dPag-bsam-ljon-bzaṅ*, pt. 3, (New Delhi, 1959)
- PSJ: Sum pa mkhan po Ye śes dpal ḥbyor, “dPag bsam ljon bzaṅ”, 『松巴仏教史』 (蘭州 1992)
- RMB: ḥJam dbyaṅs bśad pa ṅag dbaṅ brtson ḥgrus, “bsTan rtsis reḥu mig”, *The Collected Works of 'Jam-dbyaṅs-bśad-pa'i-rdo-rje*, vol. 1, (New Delhi, 1972)
- TBN: Thuḥu bkwan Blo bzaṅ chos kyi ṅi ma, “Bla chen dGoṅs pa rab gsal gyi rnam thar”, *Collected Works of Thu'u-bkwan Blo-bzang-chos-kyi-nyi-ma*, vol. 2, (New Delhi, 1969)
- TMN: Dharmasri, “rTsis kyi man ṅag ṅin mor byed paḥi snaṅ baḥi rnam ḥgrel”, 『白光解釈金質本』 (Lhasa, 1983)
- TSM: Maṅ thos Klu sgrub rgya mtsho, “bsTan rtsis gsal baḥi ṅin byed”, 『仏歴年鑒及五明論略述』 (Lhasa, 1987)
- Chandra, 1963: Chandra, L., *Materials for a History of Tibetan Literature*, pt. 1, New Delhi.
- Ferrari, 1958: Ferrari, A., *Mk'yen brtse's Guide to the Holy Places of Central Tibet*, Roma.
- van der Kuijp, 1992: van der Kuijp, L., “Dating the two LDE'U Chronicles of Buddhism in India and Tibet”, *Asiatische Studien* 46; 468-491.
- Kuznetsov, 1966: Kuznetsov, B.I. (ed.), *Rgyal rabs gsal ba'i me long*, Leiden.
- Petech, 1939: Petech, L., *A Study on the Chronicles of Ladakh*, Calcutta.
- Richardson, 1957: Richardson, H., “A Tibetan Inscription from Rgyal Lha-khaṅ; and a Note on Tibetan Chronology from A.D. 841 to A.D. 1042”, *Journal of the Royal Asiatic Society*, pts. 1 & 2; 57-78.
- Roerich, 1949: Roerich, G., *The Blue Annals*, pt. 1, Calcutta.
- Uebach, 1987: Uebach, H., *Nel-pa Paṇḍitas Chronik Me-tog phreṅ-ba*, München.
- Uebach, 1990: Uebach, H., “On Dharma-Colleges and their Teachers in the Ninth Century Tibetan Empire”, *Indo-Sino-Tibetica, Studi in onore di Luciano Petech*, Roma.
- Vitali, 1990: Vitali, R., *Early Temples of Central Tibet*, London.
- Watson, 1978: Watson, C.E., “The Second Propagation of Buddhism from Eastern Tibet according to the “Short Biography of Dgongs-pa rab-gsal” by the Third Thukvan Blo-bzang chos-kyi nyi-ma (1737-1802)”, *Central Asiatic Journal*, 22-3/4; 263-285.
- Wylie, 1962: Wylie, T., *The Geography of Tibet according to the 'Dzam-gling-rgyas-bśad*, Roma.

稲葉・佐藤 1964: 稲葉正就・佐藤長共訳『フウラン・テプテルーチベット年代記一』法蔵館

川越 1989: 川越英真「チベット仏教・流伝後期初期における『dBus・gTsaṅの出家者』の問題」『東北福祉大学紀要』13; 189-203.

佐藤 1986：佐藤長『中世チベット史研究』同朋舎

羽田野 1956：羽田野伯猷「カムの仏教とそのカーダム派並びに衛蔵の仏教に与へた影響について」
『文化』20-4；1(719)-23(697).

羽田野 1968：羽田野伯猷「チベットの仏教受容の条件と変容の原理の一側面」『東北大学日本文化研究所研究報告』4；1-153.

平川 1960：平川彰『律蔵の研究』山喜房仏書林